Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

ジョルジュ・サンドの作品における超自然現象 : 『緑の貴婦人たち』を中心に

坂本, 千代

(Citation)
近代,64:85-96

(Issue Date)
1988-06

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001635

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001635

KOBE UNIVERSITY

ジョルジュ・サンドの作品における超自然現象

――『緑の貴婦人たち』を中心として

坂本千代

『緑の貴婦人たち』(Les Dames vertes)は、五十二才のジョルジュ・サンドが一八五七年に『ル・モンド・イリュストレ』(Le Monde illustré)誌に連載し、二年後に単行本として出版した小説である。

一八五七年のサンドはほとんどパリに出ることもなく、ベリー地方の自分の館にとどまっていくつかの作品を発表しており、その中にはベリーを舞台にした歴史小説『ボワ・ドレの伊達者たち』(Les Beaux Messieurs de Bois-Doré)や同地方の農村に伝わる幽霊や化物などの話を集めた『いなかの伝説集』(Les Légendes rustiques)等がある。

『緑の貴婦人たち』は舞台をアンジュー地方の古い貴族の館にとって、遺産相続をめぐる訴訟と、その館にまつわる幽霊伝説を題材にしたものである。ここでは、サンドの他の作品と比較しながら、この小説における超自然現象について考察することにしたい。

この小説の主人公は、高名な弁護士である父親の後を継ぐことになっている若者である。彼は、本当は文学にひかれていて、依頼人の意向に左右される弁護士としての生活よりも、もっと自分の気質に合った夢想的な生活を心ひそかに望んでいる、という設定になっている。物語は主人公の回想という形で進行し、彼は一七八八年五月のある日、父親の代理として訴訟に関する打ち合わせのために、アンジェとソーミュールの間にあるヨニス伯爵家の領地に向かう。夜がふけてから目的地に着いた彼の目の前に初めて伯爵邸が姿を現わす。

それはルネサンス様式のすばらしい館であった。気まぐれのまざる良い趣味の傑作であり、見事で優雅で大胆な何かが感銘を与えるような屋敷のひとつであった。その何かは、建築家の想像力から見る者の想像力の中に移ってきてしっかりとらえ、それを実利的な世界の習慣や関心事の上にまで高めるのだ。(1)

この「実利的な世界」(le monde positif)を超える何かというのは『緑の貴婦人たち』の主要なモチーフである。館での第一夜に主人公はそこに伝わる三人の緑の貴婦人たちの話を聞かされ、真夜中にその幽霊(緑色のドレスを着た三人の女性の影)を見る。それは主人公をひどく驚かせるが、初めの恐怖が去ったあと、彼は啓蒙主義の子らしくさまざまな理由をつけて合理化しようとする。だが、二日後に起こる緑の貴婦人の二回めの出現は最初のものとは全く違ってくる。

深夜ひとりで館の中を歩き回っていた彼は、ネレイデスをかたどった美しい彫刻のある噴水のそばにやってくる。すると、月光を浴びた彫刻が突然二つに分裂して、その影が美しい姿のまま彼のほうに降りてくるのである。

その時、私はもはや何も説明しようと思わず、また何も理解したいとも思わず、無言の驚きの只中で、その亡霊の超自然的な美しさに恍惚となったのだった。(2)

幽霊は、彼女の一族の末裔であるヨニス家の訴訟について主人公に語りかける。だが、その美しさに陶酔状態となり、そのそばに行くことしかもう考えられなくなってしまった主人公は、永遠の生や死後の世界について逆に彼女に問いかける。そこで幽霊は、彼がこの世で彼女にふさわしい者となった時にもう一度彼女を見ることができるであろうと告げて消え去ってしまう。

私はあの驚くべき美女を見、その声を聞いたのだ。私がそこに行くことはできないが、そこから私のほうに降りてくることは可能な、そんな領域に彼女は存在していたのだった。(3)

このようにして主人公はこの物質世界のかなたにある超自然的な何物かの存在を確信し、生者と死者の交流の可能性を信ずることとなったのであり、このことは彼の生活と考え方を根本から変えてしまうことになるのである。遠い昔に死んだ人間の幽霊やその超自然的な美貌というのは、一八三八～九年にサンドが発表した、『スピリディオン』(Spiridion)にも共通している。その中で、百年以上前に死んだ修道院長スピリディオンは見事な金髪の美青年の姿で現われ、修道院の一室にかけられた肖像画の中の彼が涙を流したり目を輝かせたりするのである。

『スピリディオン』は北イタリアの修道院を舞台にした修道士たちの話であって、恋愛小説ではないのだが、それでも、修道士アレクシと若い修練者アンジェルの結びつきやアレクシとスピリディオンの幽霊との関係などには、非

常に情緒的・情熱的な何かがあるように思われる。

若き日のアレクシは、スピリディオンの幽霊を見た時から彼の後継者になることを決心して、試行錯誤に満ちた苦闘の生活を送ることになる。そして、修道院内の陰謀にまきこまれて窮地に陥った彼を助けたり、あるいは叱ったり諭したりして彼を導いていくのがその美貌の幽霊なのである。

「超自然的な美」(beauté surnaturelle)に触れることによって、一挙にこの「実利的な世界」のかなたにある理想の存在を悟り、それを追い求めるようになるというのは、一八三〇年以来サンドが愛読したE・T・A・ホフマンの作品、たとえば『金の壺』(Der Goldne Topf)などがその典型であるが、この『緑の貴婦人たち』においても「超自然的な美」との接触は主人公を普通の人々とは違った人間、一種の「崇高な狂気」(folie sublime)に取りつかれた人間にしていくのである。

私は信仰によって生きていたのだ。その信仰は目に見えないものを拠り所にしていた。崇高な狂気だったのかもしれない。もし理性というものが感覚でとらえうるものを拠り所にしているにすぎないのなら。(4)

この、「崇高な狂気」というのはロマン派の作家たちが好んで取りあげたテーマである。美であれ、ポエジーであれ、あるいは理想であれ、それが存在しているかどうかも証明することができないような何かの存在を確信し、物質世界のこまごまとした約束ごとを無視して(そのことによって当然さまざまな悲喜劇がひき起こされるわけだが)ひたすらそれに向かって進んでいくような状態、それが「崇高な狂気」である。これはまた、どこまで行っても決してた

どりつくことのできない目標に向かって突き進むことでもあった。

このような「狂気」の例としては、先にあげた『スピリディオン』のアレクシや、『ローラ』(Laura)の主人公(彼の名もアレクシである)がいる。『ローラ』は一八六四年にサンドが発表したファンタスティックな小説であるが、主人公は輝く星を額につけた、この世の存在ではないようなローラに導かれて北極にまで行くことになるのである。

「崇高な狂気」の中に生きる『緑の貴婦人たち』の主人公は、絶望と紙一重のストイックな生活を送りつつ詩を書いていく。彼は弁護士としての務めを果たしながらも、自分が本質的には詩人であることを信じていたのだ。ここでも、芸術家と狂気の関係という、ロマン派がたいへん興味を示した問題が、多少顔を出しているのが見られるであろう。

> 私はそれ〔狂気〕を高等な能力のように大切にして、自分がそれをまつりあげた高い位置から決して下に降ろそうとはしなかった。(5)

このように彼は一種の誇りを持って孤独な生活を続けていくのである。この姿には、サンドの一八四二～三年の長編小説『コンスエロ』(Consuelo)の登場人物アルベールに通じるものがあろう。そこで、サンドの最長の小説であり、超自然現象を扱っているという点では『緑の貴婦人たち』と密接な関係がある『コンスエロ』にここで少し目を向けておくことにしたい。

この小説の主要登場人物のひとりであるボヘミアのアルベール・ド・ルドルシュタット伯爵は、情け深く頭も良いが狂人であると人々にみなされていた。少年の頃から鋭い感受性を持っていた彼は、自分の先祖がかかわったフス戦

争のことを知り、オーストリアから押しつけられたカトリシスムを捨ててフス派の信仰を持つようになるのである。サンドによると、その教義はこの地上における絶対的な平等を実現させようとしたもので、フスの時代はもちろん、アルベールが生きた十八世紀においても到底実現不可能なものであった。

彼の「狂気」はフス派の教義によって触発され、全ての人間が平等に生きる社会という理想に向かって他のことを一切かえりみずに突き進もうとしたことにあったのである。その情け深い行いは、常軌を逸したものであるとみなされ、そのうえ彼が超能力(千里眼)を持っていたので、まわりの人々から無気味な存在として恐れられたのであった。

『コンスエロ』という長い小説の三分の一ほどを占めるボヘミアを舞台とした物語は、サンドのファンタスティックな作品の中でも特に注目すべきもののひとつであろう。ここでは超能力、幻視、前世の記憶などさまざまな超自然現象が取り扱われている。中心人物のアルベールは「狂人」であるのみならず、天才的なバイオリニストでもあった。その「崇高な狂気」は孤独と絶望に彼を追いやり、天からの慰めであるコンスエロがやってくるまで続くのである。

さて、『緑の貴婦人たち』の主人公のほうは、内面的にはこの世から全く離脱していたものの、緑の貴婦人への誓いを守るために、子としての、市民としての、弁護士としての義務を完璧に果たし続けるのである。

この固定観念の支配下で、私は善い人間になりつつあったのであり、狂気によって賢明になったというのはたいへん不思議なことである。しかし、ここには、人間というものにとって微妙すぎ、また張りつめすぎた何かがあったのだ。魂と、私という存在の他の部分との間のこの断絶、また私の生活と、青年期のあふれる力との間のこの断絶は、絶望へ、そしてたぶん激怒へと少しずつ私を駆りたてていったに違いなかった。(6)

かくて、神からの贈物のような「崇高な狂気」は、芸術家を物質世界のかなたまで連れて行ってくれると同時に絶望と自暴自棄に陥れる危険性をはらんだ両刃のつるぎであったことがわかるのである。

やがて主人公は、訴訟のことで知り合った青年ベルナールと付き合い始める。ふたりは親友となり、ベルナールは未亡人となった幼なじみのヨニス伯爵夫人への愛を、主人公は緑の貴婦人や彼女が彼に与えた運命的な変化を語り、自作の詩を読んで聞かせたりする。ベルナールは主人公の理想や憧れを理解し、彼が体験した超自然現象についても議論するようになる。主人公は、緑の貴婦人にたいする憧憬はそのまま持ち続けながらも、ヨニス邸で起こった不思議なできごとは全て自分のたくましい想像力が作りあげたものであった、と次第に確信するようになってくる。

私がベルナールとかかわりあうようになって以来、急速に治癒に向かっていったのは事実である。(7)

ここにおいて彼は「崇高な狂気」を病気としてとらえており、そこから「実利的な世界」に興味を戻すことを「治癒」(guérison)と表現している。この変化を最もはっきり表わしているのは、ベルナールの強いすすめにもかかわらず、主人公が自分の詩の出版をあきらめたという点である。有能な弁護士という評判を築く際に、詩人であるということは大きなマイナスになるだろうということが、彼にはよくわかっていたからである。

『緑の貴婦人たち』は六章からなる小説であるが、右に述べたことは最初から第五章までのあらすじに沿ったものである。これから、最後の第六章を検討することにしたい。

第六章は物語の初めから七か月ほどたった十二月のある日、再びヨニス邸に主人公が到着するところから始まる。

今度も夜になってから館に着いた主人公は、前回美しい幻を見た噴水のもとでベルナールの妹フェリシーに出会う。そして彼が非常に驚いたことに、彼女は緑の貴婦人にそっくりだったのだ。たちまち彼女にひかれた主人公は、両親の同意を得て求婚する。そして彼は、自分が見た緑の貴婦人はヨニス夫人が計画したいたずらで、フェリシーその人が幽霊役を演じたのだということに気づく。彼女のほうもあの夜以来彼にひかれていたのだ。こうして、互いの愛を確認しあったふたりは結婚する。

サンドの作品を読む人たちはしばしば彼女が物語の終わり方というものを知らないと批判する。出だしはすばらしいのに竜頭蛇尾で、とってつけたような結末になっている作品が多いと言うのである。そういった批評の当否は別にしても、『緑の貴婦人たち』のこの結末は確かに一種の肩すかしあるいははぐらかしの印象を免れえないであろう。特に、主人公がいかにして緑の貴婦人とフェリシーが同一人物であると確信するに到ったかという経過が全部省かれているため、最後のほうの主人公とフェリシーの会話の部分でいきなり彼がそれを言い出すと、それまでだんだん盛りあげられてきたファンタスティックな雰囲気が一挙に崩れてしまい、全くありきたりなロマンチックコメディになってしまっていると言えるかもしれない。

ここではそのような構成上の問題点のことは一応棚上げにしておいて、物語の最後でそれまでの全ての超自然現象(二回にわたる幽霊の出現や、緑の貴婦人が主人公に与えた指輪の消失と再出現など)に合理的な種あかしがなされているという点に注目したい。これは『ローラ』の場合も同様で、物語の最後になって、主人公が体験した恐ろしくも美しい数々の冒険は、いとこローラに恋する彼が一夜の錯乱のもとに書きつづったものであったことがわかるのである。

いずれにしても、一八五七年と一八六四年のこのふたつの小説は超自然現象に最終的には合理的な説明を与えて終わっている。ここで、彼女の若い頃の作品『スピリディオン』と『コンスエロ』をもう一度ながめてみよう。

アレクシは、スピリディオンの幽霊に導かれて数々の宗教的遍歴をくりかえしたあと、人生の最後に継続的進歩(progrès continu)の思想[8]にたどりつく。(これは当時のサンドが心酔していたピエール・ルルーの思想に他ならない。)ついに真理を得た彼は次のように言う。

否。もはや幻も幻覚も恍惚状態の夢想も必要ないのだ。アンジェルよ、死者たちは我々を導いたりあるいは叱ったりするために、我々に知覚できる姿となって墓の奥から出てきたりはしないのだ。だが、スピリディオンがフュルジャンスに語ったように、これらの死者たちは我々の内に生きている。我々は光を自分の良心と知恵の中に求めねばならないのだが、迷える良心と不完全な知恵がこの光を投げ捨ててしまうとき、我々の興奮した想像力はこれらの死者たちをよみがえらせ、彼らを良心と争わせるのだ……[9]

このように彼は幽霊の存在などの超自然現象を否定する。だが、この小説ではフランス兵の銃剣によって彼が息絶えたとき、そのかたわらにスピリディオンの幽霊が現われ、そこで物語が終わっているのである。

また、『コンスエロ』においてもその様々な超自然現象には最終的に合理的な説明がなされているが、アルベールの超能力に関することは謎のままである。そして、このアルベールの超能力は彼の「狂気」と密接な関係があり、その「崇高な狂気」はルルーの思想にしっかり結びつけられている。

このように、これらの二作品における超自然現象はルルーの思想と深くかかわっており、そこからカレーニンの意見(「『スピリディオン』の幻想性は単なる形式つまり料理のソースであり、作者はそれを使って非常に深遠な、また小説そのものとは全く関係のない宗教的・哲学的思想を『両世界評論』の読者たちに示したのだ」[10])なども出てくるの

である。それはともかくとしても、ルルーの継続的進歩の思想にもとづく転生説[11]は、やはりファンタスティックな物語に結びつけやすかったのだと言えよう。[12]

さて、一八三七年頃から十年ほどのあいだルルーの思想的影響を強く受けたサンドであったが、四八年の二月革命が起こる前あたりには、徐々に彼の影響から離れてひとり歩きするようになっていた。そして、二月革命の挫折とそのあとに続いた数々の幻滅は彼女の作品の中にも多かれ少なかれ影を落としていったのである。

それでは、『緑の貴婦人たち』にも以前のようなルルーの思想の痕跡が見られるであろうか。緑の貴婦人(実はフェリシー)は「死は存在しない。なにものも死にはしないのです。[13]」と言う。また、ヨニス夫人は主人公に次のように問いかける。

> 私と同じように、あなたは魂の不滅性というものを信じていらっしゃいます。私たちの魂と、物質から解放された魂とのあいだの絶対的な境界、それは私たちが証明できるほどそんなに明らかなものなのでしょうか。[14]

これはまさに『コンスエロ』のボヘミアにおける物語や『スピリディオン』でサンドが取り扱ったテーマそのものである。だが、『緑の貴婦人たち』の中で作者はヨニス夫人に翌日自分のその言葉を否定させ、また超自然的な緑の貴婦人はこの世に戻って来た美しい死者ではなく、生身のフェリシーであったことにしてしまうのである。

以上のように、この小説においてルルーの転生説は、ファンタスティックな背景のもとに一瞬その片鱗が窺えるのみである。

さて、主人公とフェリシーが結婚してまもなくフランス革命が起こり、社会全体が大きく変わることとなる。ヨニ

ス家の財産も散逸し、主人公の運命を変えた美しいルネサンス様式の屋敷、「実利的な世界」のかなたの何かを暗示するような館は人手に渡ってしまう。また、フェリシーにそっくりなネレイデスの彫刻も革命の頃に農民たちによって壊され、主人公はその頭部と腕のみを買い取ることができたのである。

これら全ての激動のさ中にあって唯一変わらないのは、妻とともに生きる主人公の「家庭の幸福」(bonheur de famille)だというのがこの小説の結末である。それは『ローラ』も同様であり、主人公は自分の作りあげた超自然的なローラではなく、幼なじみのいとこのローラと幸せな結婚生活を送ることになる。だが、妻となり母となったローラの瞳に何か少し魔法めいたものが残っているように、フェリシーも主人公にとっては緑の貴婦人のごとく、女性の中で最も美しく、最も善き人であり続ける。

以上、『緑の貴婦人たち』の中に現れる超自然現象に焦点を絞って、この作品における「超自然的な美」、それに触発されて起こる「崇高な狂気」およびそれからの「治癒」について、サンドの他の作品と比べつつ考察してみた。この小説では最終的に全ての超自然現象が否定されてはいるが、それらがひき起こした愛の奇蹟は「実利的な世界」の只中にあって変わることなく続いていると言えよう。また、緑の貴婦人は物質世界のかなたにある永遠の理想の象徴であるとも解釈できるであろうが、小説の結末は(二月革命以前にルルーの影響下にあったサンドが社会レベル・人類レベルでの実現を夢見ていたのとは対照的に)個人生活のレベルにおけるこの理想と現実の融合を示しているのではなかろうか。

〔註〕

(1) George Sand, Les Dames vertes, Œuvres complètes Ⅷ, Genève, Slatkin Reprints, 1980, pp. 4-5.
(2) Ibid., p. 107.
(3) Ibid., p. 143.
(4) Ibid., p. 143.
(5) Ibid., p. 144.
(6) Ibid., p. 145.
(7) Ibid., p. 188.
(8) 拙論「ジョルジュ・サンドにおけるprogrès continu の思想の研究―― Spiridion を中心として」『フランス語フランス文学研究』（日本フランス語フランス文学会）第四九号、一九八六年
(9) George Sand, Spiridion, Editions d'Aujourd'hui, 1976, p. 266.
(10) Wladimir Karénine, George Sand : sa vie et ses oeuvres, Plon, 1899-1926, t. 3, p. 220.
(11) ルルーの転生説の要旨は以下のようなものである。死は、人間が地上における生というある一時的現象から次のそれへと移るときの敷居のようなものにすぎず、人間が死ぬと、その魂はもう一度生まれかわる前に忘却にひたってそれ以前の記憶を消し去ってしまう。従って、我々は以前に生きていた人々の子孫であるだけでなく、実際に彼らそのものでもあり、このようにして我々はいつまでも生き続けることができ、また、このようにして人間は永遠に進歩し続けるのである。
(12) ただ、ファンタスティックなものにたいする愛着は、ルルーとは関係なしに子供の頃からサンドが持っていたものである。自伝『我が生涯の物語』(Histoire de ma vie) によると、少女時代の彼女はアン・ラドクリフなど十八世紀から十九世紀初めにかけてのイギリスのゴシック作家たちの愛読者であり、のちにはホフマンの崇拝者となった。また、この本の中で彼女は若死した父親の幽霊のこと、ロシアで苦しんでいるナポレオン軍を翼のはえた彼女が救うという、幼いサンドが何度も見た夢のこと、そしてまた恋人ショパンが見た夢のことなどを語っている。
(13) Les Dames vertes, op. cit., p. 114.
(14) Ibid., p. 95.